

日本語中上級クラスにおける作文指導

ーある学生の作文添削からー

原田 麻美

【キーワード】 作文添削・誤用の分類・不自然な表現・文章語としての日本語

1. はじめに

本稿は「日本語教育実践研究(5)」の「日本語6A」クラスにおける約4ヶ月間の実践報告の中から、作文添削に焦点を当てた実践報告である。日本語6Aクラスの学生総数は14名であるが、本稿では、その中からドイツの学生Mの作文と、添削の注意点、添削の実践、誤用の種類とその考察について報告する。

Mは日本人とドイツ人のハーフであり、ドイツの大学からの留学生である。家庭では日本語を使用していることから、日本語の会話においてはほとんど不自由がなく、自然な速度で会話を行う。しかしMの作文を見ると、クラスの他の学生よりも多くの誤用が産出された。

2. 日本語6Aにおける作文指導

日本語6Aでは教科書として『生きた素材で学ぶ 中級から上級への日本語』(The Japan Times)を使用しているおり、ユニット1～10のテーマで構成されている。ユニット1～9では、各ユニットの本文学習後に話し合いを行ってから、400字～800字の課題作文を課している。Mが提出した作文は、ほとんどがパソコンを使用して書かれたものであったが、Mの表記についても観察するため、今回は原稿用紙に書かれたものを対象とした。対象とする作文は、ユニット3の作文である。ユニット3では「『買う』楽しみ」という本文を学習し、話し合い、発展教材による要点をとる読解練習のあとに、「賢い買い物の仕方」というテーマで話し合いした。その後、宿題として600字の作文を課した。

3. 作文添削の注意点

3.1 学習者の作文における問題点の分類

石田(1995)では、外国人学習者が日本語の文章を書く場合の問題点を、以下のようにならべている。作文添削にあたって、参考にしたい。(英数字は筆者による。)

【a.文字・表記】

①漢字——同音異義語、音訓の混同。字体の誤り。自国の漢字の混用。

②表記——送りがな、外来語、音声上の問題の影響を受けた誤り。句読点等、各種の符号の誤用と混用。

【b.語句】①辞書で調べた語句の誤用。②日本語の語句の母語訳を再度日本語に直すために生じるずれ。③辞書に出ている語句をそのまま自分の文脈中使用するための誤り。④副詞、指示詞の誤用。

【c.文法】①助詞の誤用。②時制の誤り——スル、シタ、シテイルの混同。間接話法の誤り。③構文上の誤り——主語・述語の省略のしすぎ、接続詞の誤用、文の続けすぎによる誤り、修飾語と被修飾語の位置 etc. ④自・他動詞の混同。

【d.不自然な表現】①既習表現からの類推。②母語表現の影響。③慣用句の知識の不足。

【e.文体】①書き言葉と話し言葉の混同。②くだけた表現とあらたまった表現との混同。③デス・マス体とダ・デアル体との混用。④ダ体の濫用。

【f.その他】①段落の不自然な区切り方。②長すぎる段落。③書式上の誤り。

3.2 作文添削の注意点

Mの作文を添削する前に、担当教授である小宮千鶴子先生から学んだ「作文添削に関する注意点」をまとめたい。添削の際は「誤用を見落とさない」というのが原則であるが、作文の誤りを全て訂正すると、学習者の作文への意欲を奪うおそれがある。そのため、次のようなポイントを心得て添削するのがよい。

a. 添削対象の限定

⇒学習段階や学習者の能力に応じ、どこまでを許容範囲とするか。基準となる文法のレベルを決めておく。(注)

⇒自分が目をつけたところから直すのではなく、全体を眺めてから添削を始める。

⇒一文ずつ前後との繋がりを見る。また文体の統一がなされているかを見る。

b. 書き手の意図

⇒普段のやり取りの中で想像し、学生の言いたいこととずれないように訂正する。

⇒意図不明の部分は、学生の意図を確かめてから訂正する。判断しかねるときは「？」を使い、返却時に学生に説明を求める。

c. 誤用への対応

⇒誤用を訂正したら、なぜ違うのかの説明できるようにしておく。重要な誤りはテスト形式にし、クラス全体の問題として考えさせてもよい。

d. 内容へのコメント

⇒読者として内容に対する意見や感想を述べ、よいところをほめる。

4. 作文添削の実践

4.1 Mの「賢い買い物の仕方」の添削

以下ではMの作文を一文ごとに添削し、どのような誤用が産出されているのかを考察する。今回、なるべく文章の構成を変えずに、Mの意図をくみ取るよう留意して添削した。添削に用いた単語のレベルは1級レベル（ポイント、技、逆らう、など）、2級レベル（困難、起こる、慰める、理想、など）を中心とし、Mが用いた言い回しを崩さないよう心がけたつもりである。

下線部は筆者が誤用だと判断し、訂正した箇所である。〔 〕内は下線部の添削内容であり、{ }内は筆者が文字や記号を補った箇所である。【改行】は作文中でMが改行した箇所で、数字は一文ずつの区切った場合の通し番号（筆者による）である。

『賢い買い物の仕方』

- 1) 一般的な考え方で行けば〔一般的にいうと〕、値段と商品の重宝さのバランスがあるのか〔が合っているのか〕、そしてその商品が本当に必要なかどうかは、購入に対して〔する際に〕最も重要な要因〔ポイント〕だろう。
- 2) 言うまでもなく、こういった合理〔ポイント〕はいつまでも〔いつでも〕守られる〔守られる〕とは限らない。
- 3) 風邪、先恋〔失恋〕、落第といったような苦境〔困難〕は〔誰でも〕経験するものであり、理屈が弱まる〔そういうときはポイントが分からなくなる〕。
- 4) その一方、衝動的な欲望を逆う力〔に逆らう力〕がぬき〔起こらず〕、不機嫌の慰め〔を慰めるため〕だという口実をつくり、不必要な買い物をしてしまうのだ。
- 5) 【改行】しかし、家に帰ると、そのいいわけがガツンと明らかになり〔それは言い訳だったのだと分かり〕、買〔い〕物の不必要性が私に突けられ〔突きつけられ〕、自分は何て極端な〔→不要〕資本家なのだらう〔だらう〕と慌て、とてもいやな感情が湧いてくる〔きた〕覚えがいくつもある。
- 6) 【改行】買った〔い〕物が〔実は〕不必要だ〔った〕という事実は〔、〕なぜ家に戻るまでは、みえないのだろう。
- 7) どんなに頑張っている、その欲しいという気分はどうも〔なぜ〕わざ〔不思議な技〕のように、店内を出るまでは、解けないのだろうか。
- 8) 【改行】でも〔私は〕、理性的〔理想的〕な「買い物方針」がどんなに弱っていても〔守られなくても〕、高価な品は一切買わないことに〔→不要〕は自慢できる。
- 9) それはやはりドイツで育てた〔育った〕ためかも知れない。

最後に、もし実際の添削であれば次のようなコメントを書くだらう。

「買い物の際の、Mさんの心の動きがよく分かります。ドイツで学んだ『賢い買い物

の仕方』も、今度教えてください。」

4.2 Mの作文の誤用分類と考察

上記のように計 31 箇所の訂正を行い、石田 (1995) の分類をもとに誤用を分けた。

- a. 文字・表記 ①漢字…3 箇所 ②表記…8 箇所
- b. 語句…8 箇所 例) 合理〔ポイント〕、いつまでも〔いつでも〕
- c. 文法…8 箇所 例) 欲望を逆う力〔に逆らう力〕、突けられ〔突きつけられ〕
- d. 不自然な表現…5 箇所 例) 購入に対して〔する際に〕

その結果、広い範囲に渡って誤用が産出された。

添削の際に一番悩んだことは、「不自然な表現」をどのように訂正するかということである。M の他の作文を見ても、「不自然な表現」が多く使われていた。これは「話す」ことにおいてはほとんど問題ないが、「書く」ことにおいては、日本語らしい言い回しをまだ習得していないためだと思われる。M の作文から、「不要な買い物は、人間の感情に左右される」という意図はよく分かった。しかし、表現がそれに伴っていないように思われる。

これまで家庭や学校で習得した口語としての日本語と、作文を書く際の文章語としての日本語は、文体が異なるという点は、M も理解しているだろう。しかし作文の中で「文章語としての日本語」を書こうと意識する際に、不自然な表現が出てきてしまうのではないだろうか。おそらく辞書を引いたり、頭の中で考えたりした表現をそのまま使用しているのだと思われる。M のように「聞く」「話す」能力に長けていると、表面上は日本語能力が高いと判断されがちだが、もちろん「読む」「書く」能力も伸ばす必要があるだろう。生活の中で身につけた日本語が全てではないということを意識し、日本語の文章（新聞や本など）を読んで文章語としての日本語に慣れることで「読む」能力を伸ばし、何度も作文を書くことで「書く」能力も身につけてほしいと思う。

5. Mの作文添削を終えて

今回は、なぜその誤用を訂正したのか、学生に説明できるようにきちんと準備しておく段階までは至らなかった。しかし、実際に教師として作文添削を行った際は、なぜ訂正したのかを説明できるようにまでしておく必要がある。また、今回のように自分一人で添削していると、誤用に気付かなかったり、より分かりやすい訂正のしかたがあるはずなのに思いつかなかったりすることがあるだろう。実践研究の授業では、一つの作文を受講生全員で添削して話し合った際、院生によって訂正のしかたが違っていたので勉強になった。現場でも他の先生方がいる環境であれば、自分一人の感覚に頼らず、他の先生に助言を求めてもいいと思う。今回学んだことに留意して、これからも自己研鑽に励みたい。

初めて受講した実践研究の授業であったが、約4ヶ月の間で多くのことを学ぶことができた。あらためて小宮先生と院生のみなさんに感謝したい。

(注)

矢野他(1997)では、添削内容を「添削重要度」として3段階に分類し、重要度が高いほど、訂正する必要性が高いとしている。以下一部引用。

重要度1：他の言い回しを示すなどの訂正の必要がない添削である。

例)「日本語を勉強しています」を「日本語を習っています」とする場合。

重要度2：文意は通じるが、訂正したほうがより自然な表現になる添削である。

例)「学友の皆さん」を「友達」と言い換える場合。

重要度3：必ず訂正しなければならない添削である。

例)「結婚式を臨む」を「結婚式に参加する」に直す場合。

【参考文献】

石田敏子(1995)「書き方の指導」『改訂新版 日本語教授法』大修館書店, pp.197-214.

小宮千鶴子(1998)「書くことの指導法」『ここからはじまる日本語教育』ひつじ書房, pp.105-123.

松岡弘(1990)「書くことの指導」日本語教育学会編『日本語教育ハンドブック』大修館書店, pp.74-77.

矢野米雄・緒方広明・榊原理恵・脇田里子(1997)「日本語作文教育のためのネットワーク型添削支援システム CoCoA の構築」『先端的ネットワーク技術特集号』教育システム情報学会, Vol.14, No.3, pp.21-28

(ハラダ アサミ・修士課程1年)